episode.02

正月飾りと鬼火焚き

話し手　民宿「晴耕雨読（せいこうう どく）」オーナー
長井 三郎（ながい さぶろう）さん（昭和 26 年 3 月 17 日生）

聞き手　鹿児島県立屋久島高等学校 1 年
小倉　剛　　田中　絆
箱﨑　龍ノ介　谷　優月
眞邉　凛　　岩川　雫

「正月飾りができるまで」

しめ縄は飾る日があって、12 月 29 日は一切飾りません。だいたい 28 日か 30 日に飾ります。しめ縄をなぜ張るのかわかるかな。悪いものが入ってこないように結界をつくって囲うんです。しめ縄がその結界の役割を果たしています。これで 1 年間、悪いものが入らないように家を守ることができます。

門松は、玄関に「よりしろ」という木を立てます。神様が降りてくるところです。他の集落では竹などが使われているけど、宮之浦では、基本的にシイの木を使います。シイの木を割ったやつ 5 本で、よりしろを支えます。そこに、マツの木を立て、ユズリハを立て、門松を飾る。

「なかなか鬼が燃えない」

この門松を 1 月 7 日に集めて鬼火焚きをします。問題なのが鬼火焚きの材料で、本来は山から取ってきて、シイの木と割り木で作ってたんですが、だんだん簡略化が進んで、最近は紙に門松の絵を描いて、玄関にペタッと貼って、それで済ます家庭も多くなってきているんですね。竹を 3 本切って並べるのも流行ってきて、ちょっと困ってます。

何で困ってるかというと、鬼火焚きで燃やすときに非常に燃えが悪い。昔のシイの木だったらよく燃える。今は木が集まらず、上につるされている鬼の絵まで遠いのね。だからなかなか鬼が燃えなかった。いろいろ材料不足で困ってる。

鬼の絵は青年団で作るんですが、片っぽは青鬼さん、反対側は赤鬼さん。昔は鬼を焼き殺す前に鉄砲で撃ったり、集落によっては竹で作った弓で射貫いたり、みんなで石を投げてやっつける地区もありました。今は爆竹でバチバチやっています。

「1 月 7 日は重要な日」

鬼火焚きは古くから行われていて、屋久島の場合は 1 月 7 日が重要な日。子供たちは七草。大人たちは、42 歳の男性と 33 歳の女性が「やくおとし」。

鬼火焚きの夜、集落の中にある「十文字」という道路が交差するところでお金を撒きます。撒く人は人に見つからないように撒く。まあまあの人で 4,200 円、羽振りのいい人は 42,000 円。お金を撒く人がいなくなったら、お金を取って自分でもらう。でもそのお金にはいっぱい「厄」がついていて、家にもちこむと厄が入ってくる。次の日まで家に持ち込まず、置いておけば厄は入りません。ちなみに、自動販売機に一度入れて、返却してから使う子供もいたそうです。

「いつまで続けられるか心配」

鬼火焚きは午後 4 時くらいに火をつけて、約 1 時間あれば燃えます。鬼が死んでいくときに出る「鬼のくそ」と呼ばれるものが各家庭の庭に落ちてて、それをお父さんが「見てこい」って言って、行ってみると“かがみもち”がおいてあるんですよ。だから翌日の 1 月 8 日に鏡開きしてました。

今後どのようにして続けていくか、難しい問題ですね。さっき言ったように材料が全く変わってきて、昔はものすごいでかい山だったんだけど、今は小さい山になった。それで門松の紙を貼るだけになったり、なんかね、材料不足になってほんとにいつまで続けられるかどうか。ここが心配ですね。